

来る七月一日には、第三セクターによるガラスショップ「黒壁」がオープンするそうです。長浜の人々から黒壁銀行として親しまれていた旧百三十銀行の建物と新しいものが溶け合った素敵な店になりそうで、開店が楽しみです。

ブルンブルンブルン。バスは終点の長浜楽市に着きました。秀吉の行なった楽市楽座にちなんで名付けられたショッピングゾーン。この中にある蘭園は、扉を開けると甘い香りがたちこめ、色とりどりの蘭の花が咲き乱れています。トロピカルムードいっぱいこの素敵な所。恋人と二人で来るのもいいでしょう。その後レストランで食事というのもなかなかオシャレですね。

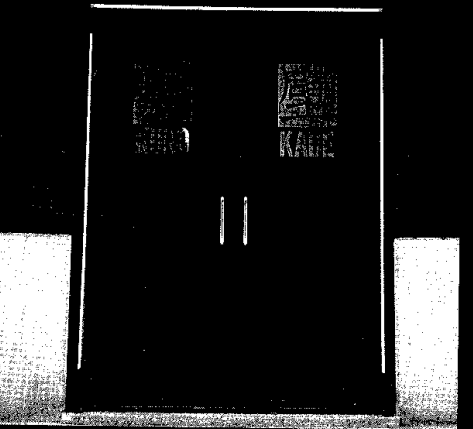
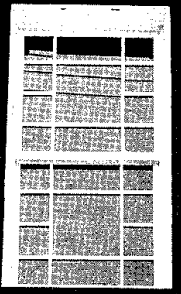
今日はボンネットバスに乗って、改めて長浜のよさを感じました。一味のある町並、そして町の人の温かくて熱い心。ブルンブルンブルン。エンジン快調！今日もボンネットバスはみんなの笑顔を乗せて走ります。



よみがえった黒壁

明治三十三年、北国街道沿いに建てられた第百二十国立銀行長浜支店。外壁が黒く塗られたことから、市民は「黒壁銀行」と呼んできました。洋館風の土蔵造りで、その建築に賭けた町の人たちの意気込みはたいへんなものでした。旧長浜駅舎鉄道資料館などともに明治の長浜の活力の象徴とも言える建物です。

以来九十年、倉庫、配送所、事務所、教会と使われ、昨春、市と民間の共同出資による第三セクターが取得して保存と活用策が検討されてきました。ガラス工房をもつガラス館としてまちのにぎわいの拠点にしようとする計画です。秋から進められていた工事はこのほど完成。次頁のようなガラス館として黒壁はよみがえりました。



染織の師匠 中川佳代子

第一回染色作家 中川佳代子さん

湖北には、美しい水と潤滑な気候風土につかわれた絹の文化があります。そんな織物の里で、ろう染の新しい世界を求める中川佳代子さんは、今とても気になる存在です。長浜と京都を行ったり来たり忙しい毎日。その合間を縫って、湖北の自然をモチーフに、創作活動を続ける彼女の工房を訪ねました。

いま、染の世界に百パーセント没りきっている、という中川さん。まず、若い女性が染色に惹きつけられたきっかけをうかがうと、「短大に入るまでは、まったくやったことなかったんです。小さいときからデザインは好きだったけど、高校では美術部にも入っていませんでした。わたし不器用だから、美大のパンフ見て、これならわたしにもできそう、と思って……」

なにげなく選んだ染の道だったようですが、入学して間もなく、運命的な出会いが待っていました。ある百貨店で開かれていた染色の

展覧会。そこで見たひとつの作品が、彼女に深い感銘を与えたのです。

「有名な作家の屏風作品がたくさん並ぶなかで、不思議な力でわたしを惹きつける作品がありました。自分でもなぜか分からなかったんですが、感動で胸がいっぱいになってしまっただけです。この出会いが、わたしの出発点だったようです。」

その作品は、日展系の実力作家、黒田暢氏の「月出る頃」。その後、彼女は短大の本科、専攻科を通じて四年間、黒田氏の指導を受けることになりました。

「後になつてうかがったんですが、黒田先生も師事されていた小合友之助先生の作品を見て、同じような体験をなさっているんです。わたしが選んだ道はまちがっていなかったって、確信しました。」

昭和五十九年、日本新工藝展に入選。その後、京都工芸美術展や京展、日展と次々に入選を果たし、一歩一歩染色作家としての地歩を固めてきました。

昭和六十二年には、地元のギャラリー縄で個展を開催。その年の夏の長浜総おどりでは、駅前通りの真ん中に「踊る」と題したスベースポブジェをつくり、市民イベントに新たな風を吹き込みました。

できるだけ簡略化して、自分のイメージを表現することが要求されるんだけど、ここにむつかしさがあり、魅力もあるんでしょうね。」

染は色とのたたかい。楽しいことよりも、しんどいことのほうが多い、と笑う中川さんを励ましてきたのは母親の和子さんと義兄の直永さん。いつも彼女の制作を見守っています。

両親ともに小学校の教師でしたが、父親の康雄さんは彼女の四歳のときに病死。だから、お母さんの手で育てられました。「展覧会が近くなって、昼夜がない生活が続くと、ついイライラして母に当たってしまうことがあるんです。ほんとに母や義兄には感謝しています。黒田先生というすばらしい師と家族が、いまのわたしを支えていてくださるのだと思います。」

中川さんの題材は、湖北の自然と風景。よくお母さんといっしょに、スケッチブックをもって湖北を歩かれるそうです。

「光と風が織りなすびわ湖のさざなみや四季おりおりの美しさを見せる伊吹山、それに畔の木のある田園風景、どれもいいなあ。でも、これは勝てないなああって思うんです。だから、植物や子供、猫、犬など好きなモチーフに片寄ってしまいがちなんです。」

中川さんは京都にも工房をもっていて、長

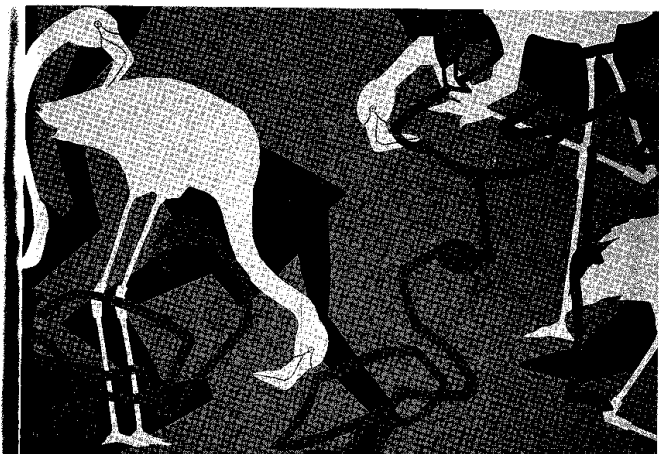


ふうあいを求める作品には、絹や麻も使います。制作は、まず題材を選び、スケッチから次に、スケッチをもとに草稿を描き、これをキャンバス状に張った布に写します。そして、薄い色から順に染料をひき、その色を残すところを、ろうで防染します。染料をひき、ろう描きをし、これを何回か繰り返ししていくわけ

です。「ろう染の魅力は、色の重ねあいのなかから自分の色を創りだしていくことですね。でも絵の具のようにたくさん色数を置けないし、染めは制約が多いんです。だからモチーフを

「初めてわたしの個展を見ていただいた長浜の方は、染色でこんなことができるのかって、みんなびっくりしていただきました。芸術版・楽市楽座でも、たくさんの方がわたしの作品に目をとめてくださって、とてもいい経験でした。」

中川さんが使う素材は木綿が多く、違った



浜と京都を行ったり来たり。長浜では屏風作品など大きなものを、京都では額に入る小さな作品を制作しています。

「湖北の自然のなかに身を置いていると、とても安心するんです。同じ植物でも、京都の植物は妙によそよそしいんですね。湖北の花や草は、すーっと入りこませてくれる感じがします。」と、語る中川さんの作品は、やわらかな生命感でいっぱい。

「自然は時間と季節によって刻々変化するから、いつ見ても新鮮な驚きがありますね。でもそのスケッチをすぐに作品に使うと生々しす

